

## 中世における僧侶の学問

—談義書という視点から—

渡辺 麻里子

### はじめに

僧侶にとつての学問とは、經典や宗旨を学ぶことである。經典は、仏の教え（悟り）を記したものであつて、それを学ぶことは、仏の教えを理解し、仏の悟りの境地に近づくことを意味していた。学問の一定段階においては、論義・堅義といった試験が行われたが、それは修学と同時に出世の階梯にも必須であり、重要な意味を持ったのである。

学問の方法には、談義という、先生から口述で教えてもらう方法があつた。これは現代で言えば、講義のような形である。また自身で本を読み学ぶためにも、知りたいことが記されている本を、閲覧・書写の許可を得て書写させてもらい入手するという方法などがあつた。

談義は、早くから注目され、談義書と文学の関わりや、談義書の範囲・種類など、様々な方面から研究が進められてきた<sup>(1)</sup>。さらに近年、寺院資料の調査が進むにつれて、僧侶の学問活動が具体的にどのような行われていたか、より実態的に解明されるようになってきた<sup>(2)</sup>。本稿では、稿者の調査対象である談義書に注目し、実際に談義書を調査して知りうる中世の学僧の学問の実態について検討し、談義書研究の課題について述べたい。

## 一、談義と談義書

まず初めに、談義である。僧侶にとって、師について学び、教えを受けることは重要であつた。学問を究めた学僧が、經典や宗旨の講義を行い、その講義を受講して教えを受けた。この講義のことを、「談義」といい、先生の立場の学僧を「能化<sup>のうけ</sup>」、受講する学生を「所化<sup>しよけ</sup>」といった。また、このような談義を行う寺院を談義所（談所・談義処・学室・学問所・学林）と呼んだ。広義には、談義は在俗の者に対しても行われ、談義の場は寺院に限らないが、本稿では、特に僧侶の学問活動に限定して話を進めることにする<sup>(3)</sup>。

こうした經典の講義の歴史は古く、天台宗においては、最澄が父母の菩提のために行った坂本生源寺と戸津観音堂の直談が、日本の最初の直談であるとされる。なお坂本生源寺の直談はすでに断絶しているが、戸津観音堂の直談は、「戸津説法」として、現代においても行われている。

談義を通じて著された本を、本稿では談義書と総称する。従来は「直談抄」と呼び習わしてきたが、「直談」という語が多義語であるため、その語を用いず「談義書」と記す<sup>(4)</sup>。中世には各地の談義所を中心として、盛んに

經典の談義注釈が行われた。談義書と一口に言っても、幅が広い。講師（能化）が自らの講義の手控えとして用意したものもあれば、講義を受ける者（所化）が筆録したもの、所化が筆録をまとめ直して能化の校閲を経たものなど多様である。

また談義の内容であるが、その対象は幅広く、『法華經』の他、『阿弥陀經』『觀無量壽經』『梵網經』『大日經』などの様々な經典や『法華文句』『法華玄義』などの注釈書について談義が行われた。『法華經』の談義書としては、春海『法華直談私類聚抄』、叡海『一乗拾玉抄』、尊舜『鷲林拾葉鈔』、実海『轍塵抄』、栄心『法華經直談抄』などが挙げられる。また論義に備えたいわば受験勉強として、義科・宗要など、論題についての談義も行われた。談義書の中には、談義の実態を具体的に示してくれる本もある。例えば第一に、談義の日付を克明に記したものである。今日は何月何日と、毎日講義録の始めに日付が記されるのである。またある本では、連日の談義の中で、「今日は竹生島詣のために休講」と記された日があった。どれ位の期間で談義するのかについても、指標になる。第二に、口述の跡を残すものがある。例えば、「前回は……まで進んだので、今日は……から」と、その日の談義の冒頭に、今日はどこを談義するのか説明しているのが記録されている。これはあたかも現在の学校で、「今日は……からなので、教科書の何頁を開けるように」などといった先生の言葉と同じである。第三に、同じ日の同じ談義を複数の所化が筆録したものが一箇所にとまっただけ残っていることがある。内容や日付から、同じ講義を受けていると明確に判断できるのである。受講の仕方を比較してみると、一方の所化は細やかに記しているのに、もう一方の所化は実に簡略な記述になっていたりする。怠惰な学生であったのか、眠かったのか、ついていけなかったのか、現代の学校でノートをとらない学生の姿を思いながらつい想像を廻らせてしまう。

談義書からは、このようにして当時の学僧の生の姿が垣間見え、現場での息づかいが伝わってくるようである。談義書を一点一点読み解いて行くことによって、より具体的に談義の実際の様相を明らかにしていくことが可能であらう。

## 二、本の書写

さて前節では、僧侶の学問の方法として、談義ということについて検討した。続いて本節では、もう一つの方法である、本の書写について検討していきたい。

本は、書いてある内容が重要であるのは言うまでもないが、書かれた内容の他にも、本の諸所（多くは末尾）に記された識語や奥書などといった、本文とは異なつて付された文章からも、様々なことを知ることができるのである。「識語」と「奥書」は同じものを指すという意見もあるが、識語は巻中どこにでも記されることがある点で区別することが多い。識語・奥書からは、本の成立した年月、著作者名、執筆動機、その本の伝来、書写年代、書写者、書写時の状況、所蔵者など、様々な情報が示される。

尊舜（一四五一～一五一四）という学僧が、『法華経』を解説した『鷲林拾葉鈔』という本がある。数点ある写本のうち<sup>(5)</sup>、檀王法林寺<sup>(6)</sup>に所蔵される『鷲林拾葉鈔』（以下檀王本と略す）の奥書を通じて、本からどのようなことが分かるのか、確認してみたい。なお『鷲林拾葉鈔』には、書写して遺されている写本と、刷られたもの（版本）があり、さらに『日本大藏経』には活字（翻刻）もある。しかし、活字では分からないことが、写本によって

判明することが、多々あるのである。

檀王本『鷺林拾葉鈔』全十冊には各冊奥書が付されている。まず巻五から見てみよう。

檀王法林寺藏『鷺林拾葉鈔』第五冊、奥書

A 于時永正九年<sup>甲午</sup>七月上旬候、於常州黒子千妙寺抄也。僻草有<sup>レ</sup>憚、賢鑑多<sup>レ</sup>恐、

窺慰愚慮而已。

釈桑門尊舜<sup>生六十二</sup>

B 本云

于時永正十四年<sup>丁丑</sup>三月廿五日書之了。

C 今云

天正七年仲冬十日、於石州福屋之内都河杖溪庵室雪窓下書訖。

専求西、四十齡

奉<sup>レ</sup>為紹隆三宝、報謝四恩、開仏知見、無作三身而已。

第五冊の奥書は、内容から三部に分けられる。私にAとCの記号をつけた。AとC共に年記があり、A・Cには人名が記される。Cの「今云」は、檀王本が何時、何処で、誰によつて書写されたものかを示す。檀王本は、書写者「専求西」（四十歳）が、天正七年（一五七九）仲冬十日に、石見国福屋郷都河（都川）の杖溪寺において書写した事がわかる。「専求西」とは、「専ら西方浄土を求める」意で、浄土僧が用いる名である。この場合は、「以<sup>いはち</sup>八」という僧が別称として用いたものであった。以八<sup>こはち</sup>は、室町後期から江戸初期にかけて活躍した浄土僧で、天文

八年（一五三九）に生まれ、慶長一九年（一六一四）九月十四日に、七十五歳で没した。諱は存易、号は行蓮社信譽という。同母弟が、『琉球神道記』や『題額聖鬘贊』の著者で知られる袋中良定である。四十歳の頃の以八は、『以八上人行状記』によれば、杖溪寺にしばしば通っていたとあるので、この奥書にも合致する。こうして『鷺林拾葉鈔』が、浄土僧以八によって、書写されたことがわかるのである。

さらに檀王本は、Bを見ると、永正十四年（一五一七）に書写された本をもとにして写されたことが分かり、さらにその本は、永正九年（一五二二）に尊舜が記した奥書を持つ本を書写したことが分かるのである。Aの部分は、『鷺林拾葉鈔』の著者尊舜によって記された部分である（自筆ということではない）。この巻は永正九年に、常陸国黒子千妙寺において著したものであること、その時尊舜は六十二歳であったことなどがわかる。

このように奥書は、その本の書写年代、書写者、書写の場所、またその本は、どのような本をもとに写されたのか、といった情報を具体的に知ることができるのである。

またさらに、執筆者の執筆動機などが記されていることもある。同じく檀王本『鷺林拾葉鈔』第二冊の奥書を見よう。

A 于時永正八年<sup>辛</sup>中秋初二日、於常州黒子千妙寺別当房、涕<sup>二</sup>老眼涙<sup>一</sup>、染<sup>二</sup>菟毫<sup>一</sup>、拭<sup>二</sup>残暑汗<sup>一</sup>、刻<sup>二</sup>鳥跡<sup>一</sup>、集<sup>二</sup>愚昧幽蛩<sup>一</sup>、示<sup>二</sup>後昏朦童<sup>一</sup>。冀翻<sup>二</sup>僻草之誤<sup>一</sup>、為<sup>二</sup>来際之芳縁<sup>一</sup>而已。

四明賤士苾芻尊舜

B 今云

天正第八仲春念六日、於石州福屋之内都河杖溪庵室書功訖。

奉<sub>レ</sub>為紹隆三宝、報謝四恩、開仏知見、無作三身而已。

專求西、四句有一。

Aは、先に見た尊舜による本奥書で、Bは專求西の書写奥書である。Aの尊舜の奥書を見てみると、永正八年八月二日に、常陸国黒子千妙寺別当房において、老眼の涙を流しながら筆を染め、残暑の汗を拭いながら字を書いたこと、愚かな知識を集めて後世の迷える者たちに示そうとしたことなどが記されている。「示後昏朦童」は、動機として重要なものであったようで、『鷲林拾葉鈔』の序文の讃辞において実海という学僧は、「示来葉」と記している。尊舜はまた巻九には「仏法興隆」、さらに『鷲林拾葉鈔』の別写本である日光山輪王寺天海藏本の第四冊や、版本には、「為法命相統」が記されている。つまり、自分たちの知識を、次の世代に伝えていくことを動機としていたのである。こうした動機は、とりわけ尊舜や実海といった談義僧にとつては重要なことであったと考えられる<sup>(3)</sup>。

### 三、本の授受—唯授一人の世界—

前節では、書写された本を通じて、様々な情報が現代に伝えられたことを述べたが、本節では、本の書写の困難さについて検討しておきたい。

そもそも本の書写と言っても、それは容易なことではなかった。その理由は、実際に写す作業の困難さもあるが、それ以前に、本というものが、写す（書写）どころか見ること（披見）すら、限られた者にしか許されなかったものであり、「写す」までに行き着くことが困難であったことが挙げられる。

師資相承においては、師匠が弟子に法を伝えていくのであるが、相承の中でも最も重要な事柄については、師匠

一人に対して、多数の弟子の中、選ばれた一人にのみ教える「唯授一人」ということが行われた。天台恵心流の三重相伝の場合、初重（Ⅱ初度、教重）を受け、第二重（Ⅱ行重）を受けた後、ただ一人が、第三重（Ⅱ証重）を受けることが出来るのである。身延文庫蔵『深秘見聞』<sup>(9)</sup>は、身延山第十二世日意がまだ天台僧で泰芸という名の時代の文明四年四月十一日に、金鑽談義所の学頭栄源から三重相伝を受けたことを示す貴重な書物である。その表紙には、「東陽頌之書 深秘見聞（証重 唯授一人）第三重」と記されている。なお身延文庫には、泰芸（日意）が授かった初重・二重の書物も揃っていて重要である。

「唯授一人」の相伝について、「不可他見」つまり他の者には見せてはならないと述べることは、本の奥書にもしばしば確認できる。

・此抄者、雖<sup>レ</sup>為<sup>ニ</sup>極秘<sup>一</sup>、不思議感得申、写置之者也。唯授一人相伝云々。其源秘曲、不可及他見云々。

（身延文庫蔵『血脉面授聞書』<sup>(10)</sup>）

・惣<sup>シテ</sup>秘伝抄事ナレ共、唯授一人相伝シテ写之<sup>ヲ</sup>候畢。（身延文庫蔵『教学抄聞書』<sup>(11)</sup>）

また「唯授一人」とまではいかなくとも、「不可見不可口外、甚深不思議ノ相伝也」<sup>(12)</sup>などのように、他見を禁じる言辭は多々見られる。他にも例えば「不可他見」「不可門外」「不可窓外」などの表現がしばしば使われる。さらに念の入った誠めが記されたものもある。

・惣<sup>シテ</sup>此抄<sup>ハ</sup>、守<sup>ル</sup>器<sup>ノ</sup>、可被授之。設雖与千金、非其機者、努々不可被許者也。師資伝来之誠也者、如此加筆处也云々。

（叡山文庫真如蔵『第二重伝授鈔見聞』<sup>(13)</sup>）

この奥書には、大事な事柄は、「法器、つまりこの教えを受ける資質があると思われるものにだけ授けるもので



あつて、たとえどんなに大金を積まれても、その資質の無い者には、授けることを許可してはならない」という誠めが書かれているのである。「たとえ大金を積まれても」という言辭が現実には即したものであることは、また後に触れるが、このように重要な教への流布・拡散は、厳しく誠められていたのである。

このことは、逆に言えば、重要な教を伝授してもらうことの難しさを物語っている。常陸国月山寺第二世の尊栄は、比叡山において、直海撰集の『雑々私用抄』を懇望する。三十歳で比叡山に行った時に、書写が許されたものの、二十四巻全部の書写は叶わなかったため、不足の巻の書写を願う。その本望を達したのは、六十六歳で堅義のために再び登山した時であつた。その間、実に三十六年である。

これだけ苦勞して入手した本であるから、当然、弟子には大切にするようにとの言辭を遺すことになる。

- ・ 右此抄者、忝直海法印御類聚、杉生一流之明筆也。自付弟外者、不可免許可秘云々。(卷十五)
- ・ 末代学者、可為唯授一人、不可及他見、留贈後賢共期仏恵。(卷二十三)
- ・ 縦雖投珍財、不可免許、返々不可他見他言耳云々。(卷十八)

右のような、大切にするようにという言辭が、ほぼ巻ごとに記されているのである。卷十八には、珍財を投じられたとしても、伝授を許さないようにという誠めが記される。これは、先に述べた「大金を積まれても」に通じるものであるが、尊栄にとっては、これは実は自分自身が伝授してもらうために行った行為でもあり、まさに現実的な忠言であつた。例えば、巻一の奥書には「随分之施物」を行ったこと、巻二十四には「若干之捧物」をしたことが記されている。常陸国から出かけていった尊栄が、比叡山内で重要な書物を書写出来た理由には、そうした「施物」「捧物」が考えられ、その効果によって伝授を受けたと思われる尊栄にとっては、珍財を投じられても渡さな

いようにという忠言は、誇張どころか、きわめて実態に添った、現実的なものであったのである。

さてここまで、書写に至るまでの困難さを述べてきたが、実際に書写する作業も容易ではなかった。書写者は、奥書に、書写出来た喜びを語るのとは別に、写し終わった時の感想を嘆息を交えて記すことがある。例えば、『枕月集』<sup>(一)</sup>には、「于時延宝八歳霜月十二日、扣<sup>クダ</sup>硯氷、灯火<sup>ニ</sup>書畢」と、つまり、十二月の寒さで硯の水が凍るのを割りながら書写したと記している。この他にも、先の尊舜も、「涕老眼涙、染菟毫、拭残暑汗、刻鳥跡」として、六十二歳の自分が、老眼の涙を流して筆をとり、残暑の汗を拭いながら字を書いたのであると、その労苦を述べている。「老眼の涙」は、常套句とも言えるほど用例が多い。他にも、「風に吹かれてしまい書写がはかどらなかった」とか「写し終わると明け方の鶏の声が聞こえた。（つまり徹夜で書いた）」など、その書写活動の厳しさを述べることもある。

さて話を戻して、こうして同門であっても簡単に本の閲覧や書写の許可が得られない状況の中、檀王本『鷲林拾葉鈔』は、浄土宗の僧侶専求西（以八）が天台宗寺院の本を書写することになる。専求西（以八）は二宮春澄（法名、実誉宗真）から見せられるのだが、この経緯を檀王本の奥書が詳細に語っているので以下に示す。

### 檀王本『鷲林拾葉鈔』第十冊、奥書（部分）

爰、芸州吉川<sup>キツ</sup>住二宮右京兆春澄<sup>キツ</sup>法名実誉宗真者、身雖<sup>レ</sup>仕武門功成名遂<sup>コト</sup>心已、帰<sup>レ</sup>仏道徳広功深、覺<sup>レ</sup>穢土<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>厭、知<sup>レ</sup>浄国<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>欣。单<sup>ニ</sup>期<sup>ニ</sup>順次往生<sup>ニ</sup>専称<sup>ニ</sup>弥陀名号<sup>ニ</sup>。併是依<sup>レ</sup>宿善内<sup>ニ</sup>薰、知識外<sup>ニ</sup>催<sup>ニ</sup>也。于時天正第七之春夏、有<sup>二</sup>伯耆<sup>ニ</sup>国人欲叛之<sup>一</sup>、為<sup>二</sup>治国利民<sup>ニ</sup>、公与一将千兵既起立当国、營<sup>ニ</sup>雲州富田城<sup>ニ</sup>之次、此疏抄聞<sup>カ</sup>有<sup>二</sup>伯州<sup>ニ</sup>大山龍藏坊<sup>ニ</sup>立<sup>シ</sup>憑<sup>ニ</sup>良媒介<sup>ニ</sup>、即寄一封書、以述<sup>ニ</sup>求法之志<sup>ニ</sup>、而訴<sup>ニ</sup>借用之望<sup>ニ</sup>。

院主法印乃開緘閣書長吁之、此抄者、開仏知見之肝心、顯本遠寿之命脉也。尤自流秘藏、豈佗門所窺乎。但今時属末法、人少宿薰、肆僧侶猶倦習俗流爭求解義、就中公軍事々繁、坐籌巨多。而克欲尋討披閱、恐是在家菩薩歟。古曰、賢者說黙待時待人。今既值其人豈得悵此法感悅借之。美談与之。公拝領願満、披覽望足。

長いため概要を述べると、安芸国吉川の住人である二宮春澄（法名、実誉宗真）は、武門に仕える身であったが、今では、仏道に深く帰依し、仏の浄土を願って、専ら阿弥陀の名号を称えていた。天正七年（一五七九）の春夏のこと、伯耆の国人に謀叛を起こす者がおり、それを治めるために、宗真は將軍と千兵と共に安芸国を出兵して、出雲国の月山富田城に宿営した。その滞在時、『鷲林拾葉鈔』という本が、伯耆国大山の龍藏坊に有ることを知る。

そこで良い媒介者を頼み、一通の封書に求法の志を述べて、『鷲林拾葉鈔』の借用を嘆願した。大山寺龍藏坊の院主法印は、書簡の内容を読み、深く嘆く。「この『鷲林拾葉鈔』という抄物は、仏の知見を開く肝心の書、仏の顯本・遠寿を保つ命脉で、天台宗にとって重要なものであるから、自流（天台）で秘藏して、他門（浄土）に見せるべきものではない。しかしながら、今の時代は末法となり、人々の心は乱れ、僧侶も修学を疎み、公の軍事に忙しく、計略をめぐらすことに従事している事も多い。そんな時代に、閲覧の要望とは、きっと在家の菩薩なのだろう。古くから言うように、賢者の説黙（菩薩の聖行）は、時を待つことと人を待つことである。今私は、待つていた人に会ったのである。どうして惜しむことがあろうか。感悦してこの『鷲林拾葉鈔』を貸し与えよう」と。こうして大山龍藏坊の院主法印は、この讃辞を添えて、実誉宗真に『鷲林拾葉鈔』を与えた。宗真は、拝領の念願を果たし、閲覧の望みを満たした。そして以八（専求西）に見せることになるのである。

本来起こり得ない、他宗の者に自宗の貴重書を貸し与えることが実現したのは、戦乱の世にあつて、なお学問に志そうという求道心に、心を動かされたからであつた。

なおこの時代、戦乱の世を嘆く言辭は、諸書に散見される。『鷲林拾葉鈔』もまた、戦乱の世に乱れた人の心や、学問をしようとしなない僧侶に不安を覚え、後の世のために記した本であつたのである。

#### 四、書写に関わる物語

前節では、奥書などの情報から知ることのできる、著者者、著者年代、著述場所、書写者、書写年代、書写場所、書写の事情などについて検討してきた。本節では、その他、奥書や識語によつて知りうる、その本の伝来や成立に関わる物語を確認していきたい。

前節で引用した檀王本『鷲林拾葉鈔』の奥書にはまだ続きがあり、そこには以八が書写に至るまでの葛藤が描かれている。以下引用する。

進使<sup>ニシテラル</sup>見<sup>レ</sup>送<sup>ニ</sup>与友人一魯道者并鄙拙<sup>ニ</sup>、々々愕然之。是台門<sup>ノ</sup>秘冊、今我家<sup>ニ</sup>到来也。太々<sup>タイキタイキ</sup>奇々<sup>キキ</sup>於<sup>ヲハ</sup>戲正是公  
善心<sup>ノ</sup>冥薰、又<sup>ハ</sup>非<sup>レ</sup>你奉公<sup>ノ</sup>余慶<sup>ニ</sup>乎。重祝<sup>シ</sup>々々。予本無<sup>ニ</sup>解說之力<sup>ニ</sup>、豈有<sup>ニ</sup>書写之斗<sup>ニ</sup>。休歇良久佗時、異日  
思付<sup>スルニ</sup>、公既於<sup>ニ</sup>忙々<sup>タル</sup>軍旅<sup>ニ</sup>尽意、彼髻中<sup>ノ</sup>明珠求得<sup>ラル</sup>。予安坐悠々寂室不遍此衣裏<sup>ノ</sup>宝玉<sup>ニ</sup>自得<sup>ス</sup>。何不<sup>ニ</sup>  
慚惶<sup>ニ</sup>自顧<sup>ニ</sup>不肖<sup>ニ</sup>。仍尅已<sup>レ</sup>励<sup>レ</sup>心、息<sup>フキ</sup>凍硯、染<sup>ニ</sup>鷄距<sup>ニ</sup>、弘雪案、馳魚網。只是欣慕前代之賢訓留<sup>ニ</sup>与  
後世之君子<sup>ノ</sup>者也。伏希<sup>フシ</sup>奉<sup>フ</sup>為<sup>ニ</sup>、紹隆三宝、報謝四恩、開仏知見、無作三身而已。

長いので一旦ここまでを見ておくと、ここは、以八が『鷲林拾葉鈔』を閲覧し書写することになる経緯が記される。実誉宗真は、『鷲林拾葉鈔』を手に入れると、友人である私（以八）に見せてくれた。『鷲林拾葉鈔』を閲覧した私は、思いがけなくも天台宗の秘本が今、我が浄土宗にも到来したことに對する感激にあふれる。とはいえ自分にはそれを理解し書写する力が不十分に思え、書写をためらってしばらく思案する。思い至ったのは、宗真は、大変忙しい軍旅の中で、意を尽くして、このような髻中の明珠（かけがえのない宝）を得たが、私は、安穩と静かな部屋で悠々と過ごしていて、この衣裏の宝玉を得たことであつた。我が身の不肖を反省し、自らの心を励まして、固まつた硯に息を吹きかけ、固い筆に墨をつけ、螢雪に向かつて紙を広げて書写したのである。

書きながらもまた葛藤が起こる。それが以下の部分である。

或人云、既<sub>ニ</sub>是專修念仏之行者<sub>ナリ</sub>。為<sub>ニ</sub>什麼<sub>ナニト</sub>讀<sub>ニ</sub>書此經疏<sub>ニ</sub>乎。予云、不<sub>レ</sub>見<sub>イフコトヲ</sub>道。若欲<sub>ニ</sub>学解<sub>ニ</sub>、從<sub>レ</sub>凡至<sub>ニ</sub>聖乃至仏果<sub>ニ</sub>一切無碍、皆得<sub>レ</sub>学也。若欲<sub>ニ</sub>学行<sub>ニ</sub>者、必藉<sub>ニ</sub>有縁之法<sub>ニ</sub>、少<sub>キ</sub>用<sub>ニ</sub>功勞<sub>ニ</sub>多得<sub>レ</sub>益也。若明<sub>ニ</sub>此文何暗<sub>ニ</sub>彼理<sub>ニ</sub>乎。特更<sub>ニ</sub>今經<sub>ニ</sub>始終結<sub>ニ</sub>歸弥陀<sub>ニ</sub>、此書<sub>ニ</sub>深奥習<sub>ニ</sub>納名号<sub>ニ</sub>。既歷<sub>ニ</sub>見聞<sub>ニ</sub>誰<sub>ニ</sub>不信行<sub>ニ</sub>。雖然、但是台家<sub>ノ</sub>解義、觀門之深々也。争<sub>カ</sub>如<sub>ニ</sub>吾宗<sub>ニ</sub>、仰信称名之高々<sub>タル</sub>耶。宜哉。一念無下、功惠誠乎。万徳所歸<sub>ノ</sub>宝号<sub>ヲ</sub>、仰願<sub>ハ</sub>、能難所難、同称<sub>ニ</sub>名字<sub>ニ</sub>歸<sub>ニ</sub>弥陀<sub>ニ</sub>。能讀所讀、共離苦界生<sub>ニ</sub>樂邦<sub>ニ</sub>焉。又賦<sub>ニ</sub>五言<sub>ニ</sub>求<sub>ニ</sub>一笑<sub>ニ</sub>。難問響<sub>ニ</sub>幽林<sub>ニ</sub>。吾曾<sub>ニ</sub>不動心<sub>ニ</sub>。三千無作<sub>ノ</sub>法本有実相<sub>ノ</sub>音。

天正第八孟春念四日、於<sub>ニ</sub>石州福屋之内<sub>ニ</sub>、都河<sub>ノ</sub>杖溪庵室雪窓下<sub>ニ</sub>全部十冊書功訖。

西方行者以八專求西、四旬有一齡。

ここでは、以八が『鷲林拾葉鈔』という典籍をどのように認識したかが描かれる。初めは自問自答の形式によつ

て、心情が記される。「ある人は、専修念仏の行者が、どうして経疏を読むのか」と非難するが、私は、その疑問は当たらないと答える。「もし学解を望めば、凡人から仏果に至るまで、すべて遮るもの無く、皆学ぶことができ、学行を望めば、必ず、有縁の法が助けて多くの益を得る。この経疏を明らかにすることは、専修念仏の理を暗くすることにはならない。特に今の経（法華經）の始終は阿弥陀に帰結し、この『鷲林拾葉鈔』の深奥は、阿弥陀の名号に習納している。この経疏を見聞することを経ても、信行に変わりはない、宜しいかな。」という。天台の『法華經』の解説書を、浄土宗の立場で解釈し、全ては阿弥陀の名号に帰すと見なしている点は興味深い。

ところで以八は専修念仏の行者であり、こうした経疏（經典の注釈書）を読むことを自分自身で批判するのは理由があった。

以八は、天文八年（一九三九）に、磐城（福島県）に生まれた。十一歳の時、いわき能満寺の天蓮社存洞上人のもとで出家し、学問に励んだ後、浄土宗名越派の学肆である円通寺（栃木県大沢）に移って修業し、さらに、白旗派の大巖寺（上総国生実）の道誉貞把について修学した。道誉は当時の浄土宗を代表する碩学で、以八の学問の素質に感心した道誉は、一家の奥旨を全て授与したという。一心に学問を修めた以八だが、ある時から学問による名利を厭い、二十八歳の夏には、師を離れて、念仏三昧を勧める諸国遊行を始めてしまう。衣食ともに節儉で、現在光明院に伝えられている七条袈裟は、平生この袈裟一つしか用いなかったというものである。一度は学問を究めて後、学問では人を救えないと学問を捨て、念仏三昧を選んだ以八であったからこそ、今こうして再び学問の書を手取ることに躊躇するのであるが、一方で、学問を究めた学僧であったからこそ、『鷲林拾葉鈔』の価値や、その本が、宗真の求道心によって天台の門を出て浄土宗のもとに來たことの重要性が理解できたのである。

『鷺林拾葉抄』の伝本は複数あるが、『鷺林拾葉抄』の本文にはそれほど大きな差がなく、いずれも『鷺林拾葉抄』という本である。しかしこのように見てくると、檀王本には、他本とは異なる伝来の物語があることがわかる。写本には、それぞれ一本ずつ背負った歴史があり、固有の存在理由があるのである。

## 五、談義書研究の現在

以上、談義書研究において、本は、その中身の重要性は勿論のこと、その本の存在自体が、様々な実態を現代に伝えてくれる貴重な資料となっている。一点一点に解明の積み重ねが、談義書の総合的な研究には不可欠である。しかしながら研究は、資料の多さに比して十分に進められてはいない。それは、原資料の多さに対して、翻刻や諸本整理の基礎作業が進められておらず、資料を不特定多数の人と共有できる状態に至っていないことが考えられる。基礎作業の遅れの理由は様々あるだろうが、何より、談義書などを記した文字の解読の難しさが挙げられるだろう。僧侶が経典や経旨を勉強する時に使用する文字は、記家文字と称される、一種独特な文字であった。稿末に付した檀王本『鷺林拾葉抄』の本文を見ていただくと、古文書や和歌の散らし書きとも全く異なる字形が確認できる。古文書や文学で用いるくずし字は、複数の字を続けて書いていくため、字形がくずされて判読しにくい上に、どこが一字なのか判然としないことがある。それに比べて、記家文字は、一字一字は独立しているので、一見読みやすくて感じるのだが、実際読もうとすると、すぐに簡単ではないことに気付く。仏書の場合、特有の略字を用いているためである。略し方は、共通の理解があったようだが、古文書に見られるくずし字とは異なるもので、知らない

となかなか読みにくい。そのため辞書も、古文書や文学作品用ではなく、仏書用のくずし字辞典を用いる必要がある。また仏書中の専門用語もまた難しく、知識がないと判断し切れないところがある。具体例で見よう。



右の写真は、檀王本『鷲林拾葉鈔』の第一冊冒頭の部分である。一行目から本文を翻刻すると以下のようなになる。



## 鷺林拾葉鈔

## 第一卷 序品

凡此法花經者、三世諸仏出世、本懷衆生成仏、直道也。サレハ今日、教主

釈尊爲説此經、華嚴擬宜、乃至般若、洮汰、四十余年、間設種種々、方

便、根機純熟、感応道交時至処。鷺嶺八年、間、宣此妙法。遂

大事、因縁顯、出世、嘉懷。又成仏直道者、權教權門意、修行送時

(略)

冒頭の「妙法花経」や、四行目の「修行」など、独特の略字が確認できる。

この翻刻の困難については、実はすでに中世から生じていた問題でもあった。例えば、身延文庫蔵『宗要宗』<sup>15</sup>の奥書に、「当夏中所用之間、各々頼入、令頓写之間、定而損落之両字、文義誤数多可有之。後見之学侶、直談奉頼許候」と見える。つまり限られた期間で急いで写させたので、きつと字が落ちていたり、文意が間違つて書写した誤りの箇所が多々あるだろう、というのである。本の書写を許可される期間は短いため、大急ぎで写さなければならぬことはよくあることである。「読めない字があつたが確かめられないので、そのまま書いておく。帰郷してから識者に確かめたい」とか、「文意不通の箇所があるが、そのままにしておく」と奥書に記されていることは多い。また「初心薄学之間、損落字、後見中々恐々也」といった、自身の学の不足のために書き誤っているかもしれないという不安を述べたものも多い。

これらの言辞には、謙遜もあつて、文字通りには受け取れないが、それでも期間が限られていて急がざるを得な

かった、というのは現実であつただろう。なお謙遜の言辞には、自身の字の下手さを述べたものも多い。「悪筆」と謙遜する中には、「日本第一之悪筆」と述べる者までいた。謙遜もなかなか大仰である。

しかし困難さばかり言つていても始まらない。活字資料の整備と提供は、今後さらに進められなければならないだろう。加えて、目録整備も必要である。特に、仏書は、一点一点の認定が難しい論義関係の書目などがあり、実際に確かめないと同一書目かどうか不明なことが多い。まだまだ多くの所蔵者の蔵書が、現在初めて悉皆調査を行つて所蔵者別の目録を作成している段階である。いずれ、『国書総目録』のような統一的な目録が整備される必要があるだろう。

## おわりに

談義書の研究は、活字翻刻の整備をされた本が少ないために、否が応でも、実際に写本を手にして研究せざるを得ないのだが、逆に写本を見ることによって、写本でしか知り得ないことを知ることも多い。

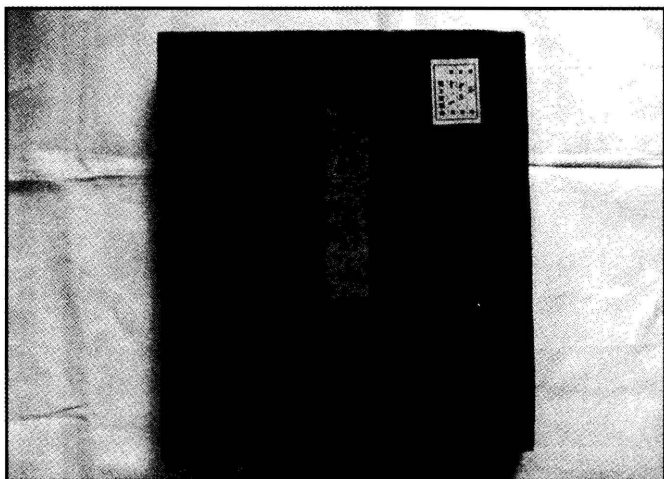
実際に本を触らないとわからないことは、たとえば本の装幀などは、実際に実物を見て初めてわかるものである。檀王本『鷲林拾葉抄』は、大変上等な紙に、豪華な表紙があつらえてあり、美しい木箱に収められている。貴重な物として大切にされてきたことが明確に認識できるのである。

本は実在のものである。現存する写本には、本に関わつた人々が、本と共に確かに存在しており、生々しい実在感がある。また本には、一つとして同じものはなく、一点一点が、「今そこにある意味や歴史」を負っている。本

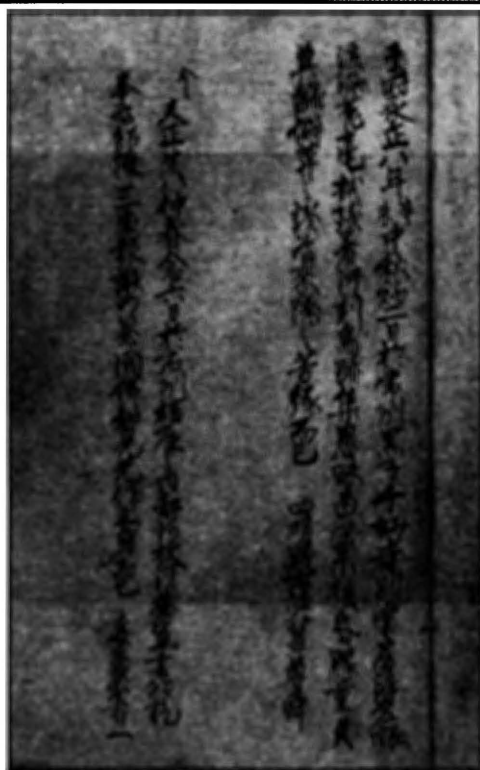
の調査をし、実際に本を手に取り検証していくことは、現代にあつて忘れられ、眠れる本を、今に呼び起こす作業でもある。

本は、様々な事を、現代に伝えてくれる。本を通じて、文学・歴史・宗教などといった分野に限らず、枠組みを取り払って、日本の「文化」を学ぶことが可能となるであろう。

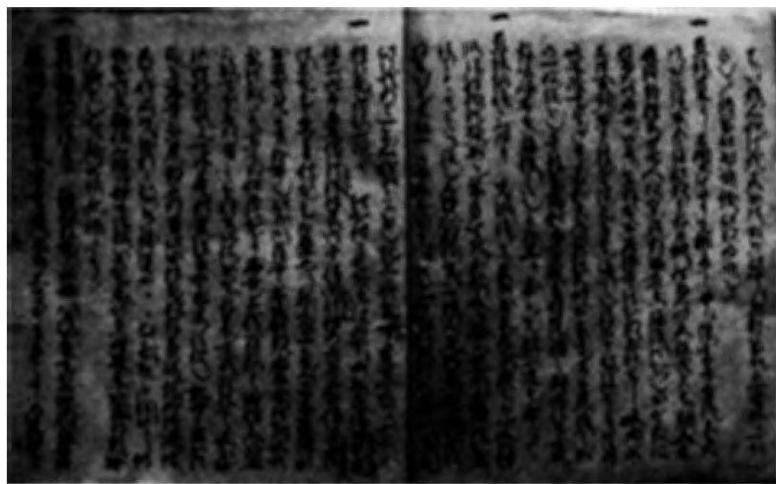
談義書の研究という観点でみれば、膨大な資料が現在に遺されているにもかかわらず、まだまだ埋もれたままで、見向きもされていない本が多く存在している。一点一点開いて風を入れ、本の語る声に耳を傾けながら、現代にのみがえらせていきたい。そして一点一点から得られた少しずつの情報を検証し、蓄積していくことによって、中世の僧侶の学問について、より実態的に明らかにしていくことが出来るのである。



〔付〕 檀王法林寺蔵『鷲林拾葉鈔』写真  
●写真1 檀王法林寺蔵『鷲林拾葉鈔』表紙



●写真2 檀王法林寺蔵『鷲林拾葉鈔』第二冊奥書



●写真3 檀王法林寺蔵『鷲林拾葉鈔』第一冊序品



●写真4 檀王法林寺蔵『鷲林拾葉鈔』第十冊識語

- (1) 談義の研究については、渡辺守邦『法花直談私類聚抄——解説と翻刻——』（『国文学研究資料館紀要』七、一九八一年三月）、同「もう一つの『法華経直談抄』（『説話文学研究』一七、一九八二年六月）、同「直談鈔と説話」（『国文学 解釈と鑑賞』四九巻一、一九八四年九月）、同「解説」（『法華経直談鈔 古写本集成』臨川書店、一九八九年）、永井義憲「講談義と説話——『鷲林拾葉鈔』に見えたるさゝやき竹物語——」（『大妻国文』四、一九七三年三月）、同「解題」（『法華経鷲林拾葉鈔』、臨川書店、一九九一年）↓（改稿）『鷲林拾葉鈔』——その撰者と文学——（『大妻国文』二五、一九九四年三月）、廣田哲通『中世仏教説話の研究』（勉誠社、一九八七年）、同『中世法華経注釈書の研究』（笠間書院、一九九三年）、同『天台談所で法華経を読む』（翰林書房、一九九七年）、中野真麻理『一乗拾玉抄の研究』（臨川書店、一九九八年）などを参照。
- (2) 大須真福寺など各地の寺院で悉皆調査が行われ、蔵書目録や奥書集成、貴重資料の翻刻などが報告されている。その意義については、西岡芳文「称名寺聖教と金沢文庫蔵書の歴史的意義」（『中世文学研究は日本文化を解明できるか』中世文学会編、笠間書院、二〇〇六年）、渡辺匡一「地域寺院と資料学」（『同右』）などを参照。
- (3) 「談義」「談義所」についての定義は、『岩波仏教辞典（第二版）』（稿者執筆）を参照。
- (4) 直談の語については、拙稿「渡辺麻里子「直談の位相」（『天台学报』四三、二〇〇一年一月）、拙稿「談義書（直談抄）の位相——『鷲林拾葉鈔』・『法華経直談抄』の物語をめぐる——」（『中世文学』四七、二〇〇二年六月）、小川豊生「直談」考——天台口伝法門のメテオロジー——（『国文学 解釈と教材の研究』四六・一〇、二〇〇一年八月）、大島薫「直談」再考（『日本仏教総合研究』三、二〇〇五年五月）を参照。
- (5) 未見の本を含めて五本、檀王法林寺蔵本を合わせて六本の写本が知られる。『鷲林拾葉抄』の伝本については、拙稿「檀王法林寺蔵『鷲林拾葉抄』について」（『論叢アジアの文化と思想』二二号、二〇〇三年十二月）を参照。
- (6) 京都市左京区、三条京阪そばに所在。
- (7) 以八の伝は、『以八上人行状記』（『浄土宗全書』第七巻「伝記系譜」所収『光明院開基以八上人行状記』、光明院十四世素信著述）、並びに『続日本高僧伝』巻第九『大日本仏教全書』一〇四、一七二頁）、『芸州厳島光明院沙門存易伝』に詳しい。
- (8) 執筆の動機については、拙稿「法華経注釈書の位相——『轍塵抄』の「訓説之志」を端緒として——」（『仏教文学』二四、二〇〇〇年三

月) 参照。

(9) 身延文庫・歴代十二世日意・B 51。

(10) 身延文庫・台口 1・5。

(11) 身延文庫・台口 2・14。

(12) 身延文庫蔵『俊範面授口決』、台口 2・1。

(13) 叡山文庫真如蔵『七箇之大事』中、『第二重伝授鈔見聞』真如(内)・11・31・86<sup>1</sup>。

(14) 叡山文庫生源寺蔵『枕月集』、生源寺蔵(内)・6・263・224。

(15) 身延文庫蔵『宗要集』第四冊、台宗 1・11。『身延文庫典籍目録』下、四四二頁(身延山久遠寺、二〇〇五年)。

(16) 身延文庫蔵『宗要集私』、台宗 2・8。『身延文庫典籍目録』下、四五四頁。

# (付記)

本稿は、平成十八年十二月二日に、弘前大学国語国文学会において講演したものの一部を、書き改めたものです。席上、御教示下さった先生方に、紙上をもちまして御礼申し上げます。